

あらすじ

帝政ロシアの首都、夏のサンクトペテルブルク。学費滞納のため大学から除籍された貧乏青年ラスコーリニコフは、悪名高い高利貸しの老婆アリョーナから借りた金を、貧乏なため娘が娼婦になったと管を巻く酔っ払いのマルメラードフに与えた。その翌日、かねてからの計画どおり、アリョーナを斧で殺害し、金を奪う。しかし、そこにアリョーナの義妹リザヴェータも入ってきたので、勢いでこれも殺してしまう。

翌朝、ラスコーリニコフは、下宿の女中が「警察に出頭せよ」との命令書を持ってきたので慄くが、行ってみると借金の返済の督促であった。しかし、刑事達が昨夜の老婆殺しの話をしているので失神する。ラスコーリニコフは、盗品を空き地に隠し、罪の意識、幻覚、自白の衝動などに苦しみ始めることとなる。様子を変だと思った友人のラズミーヒンが、ラスコーリニコフを訪問してきたところに、母から手紙で知らされていた妹の婚約者のルージンが現れる。成金のルージンを胡散臭く思ったラスコーリニコフは、これを追い出す。そんなとき、ラスコーリニコフは、マルメラードフが馬車に轢かれたところに出くわす。介抱の甲斐なく、マルメラードフは死んでしまう。もう一度マルメラードフの家に金を置いて下宿に戻ると、郷里から母と妹のドゥーニャが来ていた。ラスコーリニコフは、罪の意識のためにその場に倒れる。

母は、息子の無礼にルージンが怒っていることを心配していた。予審判事のポルフィーリは、ラスコーリニコフが2ヶ月前雑誌に発表した論文の「選ばれた未来の支配者たる者は古い法を乗り越えることができる」というくだりは殺人の肯定であり、あなたはそれを実行したのではないかと探りを入れて来る。なんとかポルフィーリの追求をかわしたラスコーリニコフだが、下宿の前で見知らぬ男から「人殺し」と言われ立ちすくむ。しかし「人殺し」という言葉は幻覚で、見知らぬ男はラスコーリニコフに用があったのだった。

スヴィドリガイロフと名乗ったその男は、ドゥーニャが目当てで、ルージンとドゥーニャの結婚を一緒につぶそうと持ちかけてくる。ラスコーリニコフは、これを追い返すが、図らずともルージンは、自らの恩着せがましさがばれてしまったために、妹の結婚は破談となる。ラスコーリニコフは、マルメラードフの娘で娼婦であるソーニャのところへ行き、聖書の朗読を頼んだり、君と僕は同類だと言ったりして、ソーニャを不安がらせる。そして、再びポルフィーリと対決するが、その横で、事件当日そこにいたペンキ屋が、自分が犯人だとわめき出したので、驚きながらも解放される。

ソーニャは、マルメラードフの葬式後の会食で、同じアパートに逗留していたルージンの策略により、金銭泥棒に陥れられた。ラスコーリニコフは、彼女を追いかけ、ついに彼女に殺人の罪を告白する。しかし、これを隣の部屋に居たスヴィドリガイロフが聞いていたのだった。

ポルフィーリが三度現れて、ペンキ屋でなく、お前が犯人だと主張する。一方、スヴィドリガイロフは、ラスコーリニコフの罪をネタにして、ドゥーニャに結婚を迫っていた。ドゥーニャは、スヴィドリガイロフのところへ来るが、結局結婚を拒絶したので、スヴィドリガイロフは自殺する。とうとう罪の意識に耐えられなくなったラスコーリニコフは、母に別れを告げる。何か恐ろしいことが起こっただけを悟る母。ドゥーニャの顔はすべてを知っていた。ラスコーリニコフは自殺を考えていたが、ソーニャの力を借りて、自首する。

シベリア送りとなったラスコーリニコフを追いかけてソーニャもシベリアで暮らす。ソーニャの感化と、刑務所での過酷な経験の中でラスコーリニコフに信仰が芽生える。彼等は、新たな人生を送り始める。

登場人物

ロジオン・ロマーヌイチ・ラスコーリニコフ（ロージャ）

孤独な主人公。学費滞納のために大学から除籍され、ペテルブルグの粗末なアパートに下宿している。

ソフィヤ・セミョーノヴナ・マルメラードワ（ソーニャ、ソーネチカ）

マルメラードフの娘。家族を飢餓から救うため、売春婦となった。ラスコーリニコフが犯罪を告白する最初の人物である。

ポルフィーリー・ペトローヴィチ

予審判事。ラスコーリニコフを心理的証拠だけで追い詰め、鬼気迫る論戦を展開する。

アヴドーチヤ・ロマーノヴナ・ラスコーリニコワ（ドゥーネチカ、ドゥーニャ）

ラスコーリニコフの妹。美しく芯の強い、果敢な娘。兄や母の事を考え裕福な結婚をするため、ルージンと婚約するが、ルージンの横柄さに憤慨し、破局する。以前家庭教師をしていた家の主人スヴィドリガイロフに好意を持たれている。

アルカージイ・イワーノヴィチ・スヴィドリガイロフ

ドゥーニャを家庭教師として雇っていた家の主人。ラスコーリニコフのソーニャへの告白を立ち聞きする。マルメラードフの遺児を孤児院に入れ、ソーニャと自身の婚約者へは金銭を与えている。妻のマルファ・ペトローヴナは 3,000 ルーブルの遺産を残して他界。

ドミートリイ・プロコーフィチ・ウラズミーヒン

ラスコーリニコフの友人。ラズミーヒンと呼ばれる。変わり者だが誠実な青年。ドゥーニャに好意を抱く。

セミョーン・ザハールイチ・マルメラードフ

居酒屋でラスコーリニコフと知り合う、飲んだくれの九等官の退職官吏。ソーニャの父。仕事を貰ってもすぐに辞めて家の金を飲み代に使ってしまうという悪癖のため、一家を不幸に陥れる。最期は馬車に轢かれ、ソーニャの腕の中で息を引き取る。

カテリーナ・イワーノヴナ・マルメラードフ

マルメラードフの 2 人目の妻。良家出身で、気位が高い。肺病と極貧にあえぐ。夫の葬儀はラスコーリニコフの援助によって行われた。

ポーリナ・ミハイローヴナ・マルメラードフ (ポーリャ、ポーレンカ)

マルメラードフの娘。ソーニャの妹。

アマリヤ・フョードロヴナ (イワーノヴナ、リュドヴィーゴヴナとも)・リップペヴェフゼル

マルメラードフ一家に部屋を貸している大家。

プリーヘヤ・アレクサンドロヴナ・ラスコーリニコフ

ラスコーリニコフとドゥーニャの母。

ピョートル・ペトローヴィチ・ルージン

7等文官の弁護士。45歳。ドゥーニャの婚約者。ドゥーニャと結婚しようとするが、ドゥーニャを支配しようとする高慢さが明らかになり、ラスコーリニコフと決裂し、破局する。ラスコーリニコフへの当て付けにソーニャを罠にかけ、窃盗の冤罪をかぶせようとするが失敗する。

アンドレイ・セミョーノヴィチ・レベジャートニコフ

役人。ペテルブルグでルージンを間借りさせている。ルージンのソーニャへの冤罪を晴らした。

アリョーナ・イワーノヴナ

高利貸しの老婆。14等官未亡人。悪徳なことで有名。ラスコーリニコフに殺害され金品を奪われる。

リザヴェータ・イワーノヴナ

アリョーナの義理の妹。気が弱く、義姉の言いなりになっている。ラスコーリニコフに殺害される。ソーニャとは友人であった。

ゾシーモフ

医者。ラズミーヒンの友人。ラスコーリニコフを診察する。

プラスコーヴィヤ・パーヴロヴナ・ザルニーツィナ (パーシェンカ)

ラスコーリニコフの下宿の大家。8等官未亡人。彼女の娘であるナターリヤ・エゴローヴナ・ザルニーツィナはラスコーリニコフと婚約していたが、病死している。

ナスターシャ・ペトローヴナ (ナスチェンカ)

ラスコーリニコフの下宿の女中。

ニコージム・フォミーチ

ラスコーリニコフが住む区の警察署の署長。

イリヤ・ペトローヴィチ

ラスコーリニコフが住む区の警察署の副署長。かんしゃく持ちで、「火薬中尉」とあだ名される。

アレクサンドル・グリゴリーウイチ・ザミョートフ

警察署の事務官。ラズミーヒンの友人。

ニコライ（ミコライ）

殺人の嫌疑をかけられたペンキ職人。彼の予想外の行動が、この事件をこじらせることとなる。

(以上 ウィキペディアより)

なぜ、ソーニャは河に飛び込まないのか？

決定的なことはこうである、—————神にとっては一切が可能である。これは永遠の真理で、したがって各瞬間に真理である。ところで人間がぎりぎりのところまで押しつめられて、彼にはもはや（人間的な意味では）いかなる可能性も存在しないようになったとき、そのとき始めて今いったことが真剣に問題となるのである。神にとっては一切が可能であるということを彼に信ずる意志があるかいながその時問題となる。—————くりかえしていうが、彼に信ずる意志があるかいなかということである。だがそれでは、それこそ全く公式通り「正気を失う」ことになりはしまいか？ しっかり！ 信ずるということは実に神を獲得するために、正気を失うことにほかならない。

キルケゴール 『死に至る病』 第一編 岩波文庫